

返し多人数待合の途より腕を能登を討くと思ひ
多人数に立はるか如しと云れ七郎中実我小
腕に及ぶ多人数れも腹帯を志し其隙に腕を
切落しか如何大力をいとも傷み叶ふ其時腹
取しと思ひ腕をつめて完ふと笑ひて騒ぐ気色を
腹帯より居る故甲は陣切れも切まされ陣心あり
と云れ諸も別ある七郎中と感しける

此存間七郎中文武に達し人ありある時の歌に

枝あふは折てしものごと花の江戸を

かゝれをくはのくはと云ふ人

扱も義光公日を重ねて責め戦ふこととも勝利もなく只
士卒を痛むるのなる故は山原に陣陣ふされけるが義光公
尾張守に宣ふ程思ひの外城中大勢擁護り又奇怪の
事甚多し押寄せ東の山より宿棚引城をあると見られ
一片の白雲とありて城を陽る白雲の中は軍勢数多打
出る始め押寄し時立谷川の軍配如何様不思議の術を行
ふ者ある宿棚寺と呼ぶを評議せん殊に能登守に知男
勝れ侍味方に為にたものと宣ふ尾張守承りて宿棚寺
へ使者を遣し其時の住僧尊法法師則登城し其
義光公宣ふ言はく頃天童押寄せに城中奇怪の